

【学会報告】

第36回日本基礎老化学会を終えて

森 望

長崎大学医学部 神経形態 (第一解剖)

本年6月4日から6日の3日間、第36回日本基礎老化学会が第28回日本老年学会の分科会として大阪中之島で開催されました。老化関連7学会合同の第28回日本老年学会総会は森ノ宮医療大学学長の荻原俊男先生を会長とし、第36回日本基礎老化学会会長は長崎大学の森が会長を務めました。初日の4日が合同総会として主会場である大阪国際会議場(グランキューブ大阪)のホールにて特別講演、シンポジウム、合同ポスター発表等が開催され、夕刻には隣接のリーガロイヤルホテルの光琳の間において7学会合同の懇親会が開催されました。特別講演では101歳になられた日野原重明先生が「老年学の過去、現在と将来」と題して講演されましたが、その迫力に市民も交えたほぼ満席の聴衆皆が圧倒された感がありました。

基礎老化学会は5日と6日に主会場(講演会場)を大阪大学中之島センター10階の佐治敬三メモリアルホール、また副会場(ポスター会場)を大阪国際会議場3階のイベントホールとして開催されました。一般口演33題、ポスター発表26題(一般9、若手12、合同5)、特別講演1題、ランチョンセミナー1件、日韓合同シンポジウム9演題、そして市民公開講演会8演題など、密度濃い科学討議と市民啓発の講演会が活発に行われました。参加総数は117名(内学生16名、韓国人招聘者9名、国内招待者8名)でした。基礎老化学会会員の少ない大阪での開催でしたので、学生の参加が少なかったのは残念ですが、企画盛りだくさんで、多くの会員には刺激的な会合になったのではないかと思います。中日5日の昼すぎの特別講演は大隅良典先生(東京工業大学)からご自身のオートファジー研究を総括していただき、また最終日6日のランチョンセミナーではタカラバイオの協賛により鍋島陽一先生(先端医療センター)にクロトーマウス研究の最先端を話していただきました。いずれの講演も非常に密度濃い、科学の神髄を感じさせるもので、それぞれのお話の中から、老化細胞における老廃物制御の重要性と老化動物におけるシステムとしてのイオン代謝の重要性を再認識させられましたが、それ以上に、どのようなテーマであれ大きな視点で深く科学する心に魅了された講演でした。中日の午後の日韓合同シンポジウムと一般口演を終えたあと、講演会場から中之島沿いにそぞろ歩きで10分ほどの大阪中之島フェスティバルタワーの2階フェスティバル&ビアホールで基礎老化学会の懇親会としましたが、会員の親睦と招待者との交流でこちらも大いに盛り上がりました。

翌日、午前中はポスター発表、昼にランチョンセミナー、そして口演と続きましたが、総会のあとは午後4時から6時まで、日頃の基礎老化研究の成果と視座を社会還元する目的で市民公開の形での講演会を「百寿者から学ぶライフスタシス」と題して開催しました。目玉には現在106歳の鼻地三郎先生(福岡教育大学名誉教授/文学博士・医学博士)を据えましたが、ご自身の生涯を振り返りつつ、高齢でも強くしっかりと生きる心構えを説いていただいたように思います。第一線の科学討議にも勝る「感動」を満席の聴衆に与え、最後は黒田節の舞で締めいただきました。実は、この講演会の成立へ向けては年頭から長い準備を重ねてきました。ご専門は脳外科ながら沖縄のスーパー老人(傑出者)の脳を数多く見ておられる琉球大の石内勝吾教授に1月にプランを打診し、2月には福岡のご自宅に鼻地先生をお訪ねし、3月には鼻地先生とその親衛隊を含めて沖縄に飛んでいただいて、琉球大の病院で脳画像をとりました。この企画には急遽、韓国のKBSも取材に入り、この106歳の脳を科学する試みは、韓国でKBS開局40周年の記念番組「ホモハンドレッド」の一部として放映されたようです。市民講演会では、石内教授からこの106歳の鼻地脳を含めて傑出脳の中身を披露していただきました。続いて、88歳の大村裕先生(九大名誉教授)に百寿者の脳の生理を説いていただきました。講演会の最後は老人研の丸山直記先生に基礎老化研究は高齢化社会に夢を与える学問であると総括していただき幕を閉じました。朝日新聞社のバックアップもあり、大変有意義な市民啓発になったと思います。「百寿者万歳」。

今回の学会運営を振り返りますと、私ども事務局は長崎にあって大阪での会場をいろいろ想定しながらプランを組んで行く難しさがありました。また、大阪のコングレとの間で予期せぬ連絡ミスもあって、受付の不具合など、参加された会員の皆様には多少の不便を感じさせたところもあったかと思いますが、全体としては質のいい大会運営ができたかと思っています。6月5日の朝、8時半、冒頭の開会の挨拶でも述べましたが、私自身が修士の学生として老化研究を始めた年に第1回「日本基礎老化研究会」が東京大学薬学部の記念講堂で開催されました。山田正篤先生が大会長でした。まだ要旨集が手書きの時代です。その後、細胞老化の全盛期から寿命遺伝子の発見、個体老化の重要性の認識から昨今のアンチエイジングまで、時とともに基礎老化研究も左右にうねりながら大きく流れてきたように思います。自分自身もその分老

化してきたわけですが、それが今回第36回大会となって、その会長を務めさせていただく機会をいただいたことに改めて感謝しています。今後も、基礎老化学会の毎年の大会が質のいい科学を意識しつつ、会員の心をつな

ぐ科学道場であり親睦の場でも有り続けるよう、また願わくは最近世界遺産登録されたという「富士山」のように、その裾野がますます広がってゆくよう祈ります。

第36回 日本基礎老化学会  
Osaka Niisanoshima 2013  
Homeostasis to Lifestasis : 恒常性の維持と破綻から考える老化脆弱と老化制御  
Plenary Lecture: Dr. Watarai Osamu  
Lanchon Seminar: Dr. Yuzo Kobayashi  
The 32th Japan-Korea Gerontological Joint Meeting  
Public Lecture: Lifetesting, a lesson from centenarians studies

